

Tether Lego

H. I. L. L

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ツイッターのノリで始まってしまった小説化企画です。フォロワーさんを擬人化して作品を作っちゃいました。この作品が処女作なので至らない点や拙い文が多々見受けられます。それでも、大丈夫って方はぜひ読んで頂けると嬉しいです。

目次

エピソード0	1
エピソード0 プロローグ、1章	29
エピソード0 2章	35
エピソード0 3章	39
エピソード0 4章	48
エピソード0 最終章、エピローグ	51
side story 現状と幻想	58

エピソード0

プロローグ

小さい頃からの憧れだった千枝流学園。何の変哲もないどこにでもあるような私立の女子校だ。しかし、地元では珍しい華々しい存在に通えることになった私、木津芽衣はいきなり現れた美少女転校生に一目ぼれしちゃって?!?!

なくんて、ありがちな自己紹介と共にありきたりな百合シチュ妄想してしまった。魔法少女にでもなつてその子のために悪魔として世界を作り直すつてもなかなかいいわね。いつも通り何気ない学校の帰り道、相も変わらず自分で百合妄想なんて我ながら引く……まあ、尊いからよしとしよう。なんてつたつて姫女子で夢女子だもんねっ！（はい、そこ、意味違くない？とか言わない。こまけえこたあいいんだよ。女の子が好きなんだよそれだけだよ）

でも、もつと尊いシチュはないかな？……あ！そうだ。いいこと思いついた……

1章 生徒会役員達

学校が終わり、まず向かうところはただ一つ。生徒会室だ。伝統ある千枝流学園の新生徒会が決まって早一か月。風が涼しくなり夏の暑さが中途半端に残る10月を迎え一層身が引き締まる。会計という役割を貰ったからにはやりとげるのが義理だろう。生徒会室が見えてきた。よし、今日も頑張るぞ。

「こんこちは」

生徒会室の扉を開け開口一番に挨拶を済ませる

「藤吉さんこんこちは」

会長から挨拶を頂けた。我が学園の生徒会長、遠藤直はすでに仕事を始めていた。さすが会長だ。感心していると、会長の隣からもう一つの声が聞こえた。

「えるちゃんやつほ〜」

那須副会長の明るい声が生徒会室中に響き渡る。やつぱはこの子いつも元気だな。適当な挨拶を済ませると自分のいつもの席に座り、周りを見渡す。会長と那須さんと自分以外に誰もいないようだ。1年生メンバーが見当たらない。

生徒会メンバーは先ほど挨拶した2人と私、そして書記の遠藤あん、同じく書記の福田唯香。以上の2年生が3人、1年生が2人の5人での体制なのだが1年生の2人がまだ来ていない。

「1年生遅いですねえ」

「確か1年生は集会があるらしいけどそろそろ終わると思うわ」

何の気なしに呟いた独り言に会長が答えてくれた。

「遅れました!!」

「話をすればなんとやらだね」

さて、ちょうど1年生組が合流したところでお仕事始めますか!!

「会長!!今日は何をしますか!」

やる気満々に尋ねる

「先週も言ったのだけれども、今年度、生徒会で動く大きいイベントは卒業式だけで、期間がまだあるので今日も雑務をお願いします」

「そうですね…」

こう言っちゃあ、あれだけ少しものたりない気がする。せつかく生徒会に入ったんだからもつと忙しくなると思ってたんだけどな。

「心配しなくても卒業式準備がはじまるといってもなく忙しくなるから今は通常業務頑張らしましょう」

会長からの言葉にもう一度頑張ろうって気持ちになったが、一つ気がかりなことがあった。

「それで、どうして芽衣がここにいるの?」

「ふえっ?!?!」

すつとんきような声を上げながらその子はその場に立ち上がる。

「え? バレてたの?」

「当たり前でしょ。ゆいか達と一緒に入ってきてたの見てたんだからね」

「そこで止めない藤吉さんも大概だけれども…」

いやまあ、面白そうだったしいかなって…てへペろ。

この子は木津芽衣。私のいとこなんだけれど色々と変わってる。ていうかこの子ほんとどこにでもいるな。

「それで何の用なのよ」

「別に。暇つぶしに来ただけだよ」

いや暇つぶしにくんなよ… って言葉は飲み込み、悪戯に四天王の話を振った。

「そういえば会長、要注意四天王の対策はどうしましようか」

この千枝流学園は地域の方々にも認められる風紀ある華々しい女子高だ。しかし、中には風紀を乱すものもいる。その中でもより要注意な人物が4人いる。その名も四天王。数々の伝説を残す彼女らは生徒会でも手に負えないほどやばい。そう、やばいのだ。その話を振ったのはもちろんこの木津芽衣がその一角を担っているからだ。

「そうね、要注意四天王は…現行犯で捕まえ課題を倍に。特に木津さんは20倍にしてください。もしくは私が直々に燃やします。」

風紀を重んじる会長は四天王に対してとても厳しい。特に木津さんに対してはヘイトがえぐい。一体なにしたのよ芽衣…

「ちよつと待つてよ会長!!なんで私だけ20倍?!」

「うるさいですよ。黙らせるために一度燃やしますか?福田さん手伝いなさい」

「はい、閣下!!」

「なんでそこノリノリ!?そんなに私悪い事した??」

「姉ちゃん、あんも手伝うよ!!」

「ここでは会長と呼びなさいっていつも言ってるでしょ。まあいいわ。あんも一緒にやるわよ。」

「じゃあ、私もっ!!」

え?那須さんも??私以外みんなノッチャった。私も流れに乗っちゃお。

「芽衣!!これを食らえ!!黒バス青黄合同!!グフフフフ」

「姉ちゃん、あれなに?」

「あん、見ちゃだめよ。あんにはまだ早いわ…」

『黒木のバス』の青間君と黄原君のカップリング、青黄が詰まった一冊。すべての話の

展開がずっとドキドキしてもう読むのがしんどい…。辛い…。とにかく、青黄オタク全員に呼んで欲しい伝説の一冊!!」

しまった…つい、いつものが出てしまった。

「青黄は地雷なおおおおお」

主人公黒木と赤峰のカブ、黒赤が好きなき芽衣の逃げていく様子を見ながら下校時間を告げるチャイムが聞こえた。

「お前ら、まだ残ってたのか。さっさと片付けして帰るんだぞ」

生徒会顧問の田洲岡先生からも言われたし帰る準備するか。

「そろそろ帰りますか。」

「そうね…」

会長は安堵したような笑顔で木津さんを見送りながら帰り支度を進める。

結局、今日は遊んで終わりだったけどこれはこれで楽しかった。こんな日々が続けばいいな。

人もまばらなオレンジ色の帰り道。すでに一日の活動を終えた校舎を背に歩き始める。

始まってまだ1か月。よし、明日も頑張るぞい!!

2章 帰宅部活動記録ノート

生徒玄関前集合だったよね。いつも通り。昨日も一昨日も明日も明後日も毎日待ち合わせをしてはいつも通りのみんなと帰るいつも通りの帰り道。また今日も私が一番乗りだ。早く来ないかな。

「おっ、やっぱねるは早いなあ!」

手持無沙汰に待っていると早速2人目がやってきた。可児京、いつも通りのメンバーの一人だ。

「京が遅いだけだよ。他の子もそろそろ来てもいい頃なのに」

「LHRが長引いてるらしいね」

他愛無い会話を繰り返しながら待っていると、走り寄ってくる人影が見えた。

「ごめん、待った?」

「ううん、今来たところ。じゃあ行こうか」

「なに遊んでんの…:」

遅れてきたれん子とめぐみがここまで走り寄りいきなり腕を組みながら歩きだしたもんだから面食らってしまった。マジでなにこれ…:

「デートで待ち合わせしているカップルの真似だって。さつき思いついたらしい…:」

一緒に来ていた、くみが控えめな可愛らしい声で訂正してくれた。まあ、細かいことは気にしないでおう。揃ったことだしぼちぼち行くか。

「飽きた」

校門を抜け自分たちの家に向かって歩いてしていると唐突にれん子がこの一連の流れに飽きたのか腕を組むのをやめた。ほんとこの子らノリで生きてんなあ。

「どうして!!あの時、ずっと一緒にいるって言ってくれたじゃない!!れん子と離れたくない!!」

一瞬ネタだと思いが、めぐみと幼馴染の私にはわかる。この子、半分くらいガチだ。昔からレズっ気が多少あったが、最近拍車がかかっている気がする。女子高だからしようがないのかな。まあ、別にいいと思うけどね。当のれん子はくみと京の会話に混ざって話を聞いていない。しようがないからめぐみと話してやるか。

いつも通り道なりに歩いていると、道沿いにある帰りにいつも入る駄菓子屋が見えてきた。

「今日も行こうよ!!」

「よし、行くか。」

京とれん子に押されて店に入ると、意外な2人がそこにいた。

「愛・クレア!なんでここに??愛達の学校は真逆の方向じゃない?」

「いやあ、クレアがどうしても駄菓子屋行きたいっていうもんだから連れてきた」

京の中学の時の同級生である針須愛と愛の学校の転校生である九条クレアとは京繋がりです交流があった。

「タイヘンですよ!!子供がさわられる位置にタバコが置いてマス!」

「これは、ココアシガレットっていうお菓子なんだよ。食べてみる?」

「タバタイです!!」

愛とクレアの掛け合いは見ていて微笑ましい。さて、私もいつものやつ買うか。私は80円のラムネときなこ棒2本でちょうど100円のセットをいつも買う。100円でこの満足感は素晴らしいし、おやつとしてちょうどいいポリウム。完璧。完成された形。みんな各々自分のものを買い、食べ歩きながらも一度帰途につく。

ん?あそこにいるのは木津さん?なんでこんなところにいるんだらう。ほんとどこにでもいるなあ。まあ、気にしないでおくか。そろそろ、みんなが分かれる分かれ道だ。

「じゃあ、ここでさよならだね。」

「皆の者、闇にのまれよ」

「ああ、寂しい。いつそのことねるの家でお泊りしたい」

「えっ、スルー!?!」

「あつ、いいねえ。やろうよ。5人でお泊り!!」

「じゃ、じゃあ…週末とかは…」

「面白いそうだね。じゃあ、続きはLINEで話そうよ。それじゃあまたね。」

5人が各々思い思い話しながらそれぞれの帰途につく。うん、いつも通り。レズっ気のみぐみも、蘭子好きのれん子も、実は四天王の京も、いつもサポートしてくれるくみも、この私も。

「あつ、一番星だ」

あと何回星を見上げるのだろう。限られた時間の中で私たちのいつも通りはいつも通りに流れていく。

3章 ほーかごぐらし

「はあく、終わった終わった」

本日最後の授業チャイムがなり、ある者は部活に、ある者は生徒会に、ある者は帰途につき散り散りになる教室の一角で一般には知られていない秘密の会合が開かれるのであった

「いや、こんな公の場でやる秘密の会合があつてたまるか」

きいの冗談に適當につっこみながらいつものごとく集まってきているみんなに目を

向ける。自分の手元にあるスマホとにらめっこしながらゲームをたのしんでいる。

「ああああああ、1グド……」

「は？なんであそこ抜けるの?？」

「りんごはまだましでしょ、りんごは文句言う資格ないから」

私ときい以外の鳴、なの、環は『パンドリ！ガールズパンドバーティ』、通称ガルバの協力ライブをしている。

「せつかくこれだけいるしなんかやろーよ。ほら、いさみも暇そうにしてるでしょ。」

自分が暇だからって私をだしに使わないですよ。確かに暇ではあるけど。

「別にいいけどなにやるの?？」

「めんどくさそうな返事をする環をスルーして、きいはおもむろにトランプを取り出す。」

「このメンバーでインディアンポーカーをします!!」

インディアンポーカー?ポーカーは知ってるけど、インディアンポーカーは初めて聞いたな。

「インディアンポーカーってなに?？」

めいの疑問に答えるべく、きいは意気揚々と説明をはじめ。ほんと楽しそうだな。

「インディアンポーカーとは、それぞれ1枚カードを見ないように引いてみんなが見え

るようにおでこの前に掲げる。あとは普通にポーカーと同じ。自分が勝てると思えば「勝負」、負けると思えば「降りる」を宣言。今回は賭け金はなしで、単純に勝ったら1ポイント、勝負して負けたら-1ポイントで3ポイント先取で勝ち。最下位の人からジューズ奢りでどう？」

「まあ、ともかくにもやってみなきゃだな。」

「結構面白そうじゃん。」

なんだかんだノリがいいのありがたいな。ルールは大体分かったしやるか。

「じゃあ、さっそく始めようよ」

各々がカードを1枚ずつ手に取りおでこに掲げる。

なのが5、きいが8、環が6、鳴が10。ぱつと見、鳴が一番大きいが自分の数字が分からない以上簡単に降りるのももったいない。少し揺さぶりをかけてみるか。

「きいの数結構大きい。私は降りよっかな。」

さて、鳴はどうするか。

「え？鳴のほうが大きくない？」

ばっつか、なの。こう言っちゃったら…

「じゃあ、私勝負する」

ほら、鳴が勝負しちやっただじゃん。まあ、私の方が小さいことがわかったし降りる

か。

「私は降りる」

「じゃあ、私も」

「自分は勝負する」

「降りる」

なのと鳴だけ勝負して第一回目の話し合いは終了。

案の定、私のカードは6で10には届かなかった。マイナスポイントにならなかっただけましか。

現在ポイント きい、環、いさみ0 鳴1 なの—1

早速次のゲームを始める。

今回のカードはなのJ、きいが5、環が3、鳴が3。早くも環が動いた。なのの方を見ながら

「今回はたまの勝ちかな」

なるほど、そういう狙いか。この環が作った流れに乗るか。

「環が勝つかどうかはわからないけど、なのには勝てそうな気がする。」

さあ、どうする。なの。

「え？マジで??じゃあ降りちやお」

あれ？簡単に降りてくれた。ちよろい。問題は自分がきいより大きいかなんだよな。ここは勝負するか!!

「よし、勝負する」

「勝負」

「ここは降りる」

各々判断し、勝負を選んだのはは私と鳴ときいの3人になった。結果は私の勝ち。私のカードは8だった。やった!!

「ちよつと!!私勝負したら勝つてたじゃん!!」

「ほんと、なの弱すぎwww」

「素直すぎ」

「次は絶対勝つてやる〜」

現在ポイント 環、鳴0 いさみ1 きい、なの1

それからもゲームは続き、勝負は大詰め。ポイントが環1 鳴、私2 きい0 なの3となった。それにしてもなのが弱すぎる。

次のゲームが始まった。

今回のカードはなのが3、きいが6、環が10、鳴が5。問題は初手だ。誰を勝負させ、誰を降りさせるか。自分が勝つためにはその見極めが大切だ。お互いがお互いに

考察を巡らせ自分に有利な状況を作り上げていく。何度も繰り返してプレイしているため、より高度な心理戦を強いられる。先に動いたのは環だ。環はきいに揺さぶりをかける。

「勝ちたかったら今回は引いた方がいいかもよ〜。」

「あつそ、じゃあ引かないわ。」

まあ、そうなるでしょうね。大きめの数を落とすのはセオリー。ということは最初に狙われた人はその人にとつて一番大きい数である可能性が高い。よつて引かない方が得。というわけでもない。それを狙つてわざと低い数に揺さぶりをかけるといふ作戦も取れるのだ。結局そのあたりも色んな人の揺さぶりを聞きながら自分で判断するしかない。そのためにも引かずにしつかり見極めるといふのは無難だろう。しかし、今回の場合は環からみても6という数字は高めにあるはずだ。他の数は3とか5なのだから。つまり、この揺さぶりはさつきの話の前者。大きい数を潰すという狙いがあったのかもしれない。ということとは、私は少なくとも6よりも下である可能性が高い。これも含めもう少し考えてみよう。

「たまk…」

名前を言い終わる前に、ある危険性に気付いた。私が6より下という可能性がある以上、この場の一番大きい数は環の10である可能性が高い。ここで変に揺さぶりをかけ

ると、環に一番大きい数を持つているということを教えることになってしまふ。直接揺さぶりをかけずに自分が小さいと思ひ込ませる方法はなにかないかな。そうだ。これだ。私は環のおでこに掲げられたカードを横目で見ながら話し始めた。

「環はきいを潰したいだけだよ。信じるかどうかは任せるけど、勝負すると勝てる。こつち側としてもリーチが増えるよりまだマシ。降りちやダメだよ。」

あえて、2番目に大きい数のきいを推すことで自分は小さいんだと思わせる。これで、乗ってくれば降りてくれるはずだ。

「たまは降りるよ」

よし、これで私も降りてしまえば無駄な失点をおさえr…。待てよ…。もしこれと同じことを最初から環がやってたとしたら？私を降りさせるためにあえて2番目に大きいきいに揺さぶりをかけてたとしたら？私のただの妄想だとしたらせつかくのリーチを逃すことになる。でもこれで俺が6よりも大きかったら？その可能性を見つけてしまったらそれ以外に考えられない。ここは…

「勝負する」

言つてしまった。でも、もうあとは結果を見るだけだ。後悔はない。

最終的に勝負したのは私、きい、鳴の三人。もし鳴が一番大きかったら鳴の勝ちでこのゲームは終わりだ。でも、私もリーチだ。もちろん、私の勝ちの可能性もある。さあ、

勝負だ！

3人はおでこに掲げられたカードを同時に表向きで机に置く。きいが6、鳴が5、そして私が、Q。やった!!! やつぱり、そういうことだったんだ！

「え？ たま結構大きかったじゃん！」

「私、環と同じことしてたんだよ!! 気付いたのはギリギリだったけどね。」

「なんだよお。悔しい!!」

わいわい、みんなでおしゃべりしたところでみんなが忘れてるであろう罰ゲームの話をしよう。

「1位は私で最下位はなのに決まったところで、ジュース奢りタイム!!!」

「忘れてた!! それで、なにが飲みたい？」

「魔剤」

ここぞとばかりに210円もするエナジードリンクを所望した。あ、魔剤っていうのはモンスターエナジーのことね。これ常識だから。

「いさみそれ好きよね」

「いや、いさみだけじゃなくてみんな好きでしょ。たまも好きだし。徹夜に効くんだよね」

わいわいしていると、廊下を歩いていた生物の麦田先生が教室のドアを開ける。

「おいお前ら、もうそろそろ下校時間だから早く帰れよ。木津、お前も早く帰るんだぞ」
え？木津さん？私は先生が目を向けた教室の後ろのドア近辺に目を向けるとそこには静かにひたすら何かを書いている木津さんの姿があった。びっくりした。ていうか、木津さんどこにでもいるな…。それはともかく、麦田先生にも言われたしさつさと帰ろう。

「じゃあ、みんな帰ろっか」

帰り支度を整え、教室を出る。一応あいさつしとこう。

「木津さん、また明日ね。さようなら」

「さつ…。さよなら…」

少しキョドった様子で返してくれた。人見知りかな？クラスメイトだしもつと気軽に接してくれると嬉しいんだけどな。

私は教室を後にした。ただ一人、彼女をあとに残して。

4章 死んだ魚の目睡眠不足デスマーチ部

最近の千枝流学園には体育会系の部活以外にも文化系の部活も充実している。文芸部、茶道部、美術部、電子工作部、そしてわたしの所属する情報処理部。他にも、何個

かあるが有名どころはこんなものだろう。情報処理部は主に情報系の活動をしている。具体的には、度々行われるコンテストで発表されたテーマにそって開発をしたり、この部での活動を通して学んだこと研究したことをみんなの前で発表などをしている。今日もいつも通り、次のコンテストのためにアイディアを練るか。

そのコンテストに出るメンバーである香風恵子、海老名花帆、長江百合で囲む机へ近づく。

「みんな早いね」

「果奈が遅いだけだよ」

「おっ、やっと来たか。早速続き話してくよ」

「イノシシ被害を抑えるためになにg…」

今は、コンテストのテーマであるイノシシ被害をICTを用いてどう対処するかという課題に取り組んでいる。

「イノシシをどう検知して、どう対処するか。そしてその対処をしていく上でどういうシステムを作っていくか」

「赤外線感知ってできるかな？」

「どんなプログラム書けば効率的に伝達できるかなんだよ」

結構、議論は進んできたしちよつと遊びに行っちゃってもいいかな。気分転換にもな

るし。

「ねえ、一旦休憩しない？喉乾いたから水買ってくるね」

その場から離れるとすぐに、1年生メンバーのグループが見えた。何かやつてるのかな？聞いてみよう

「かりん達はなにしてんの？どつかのコンテストの開発？」

「はい、私たちは近々行われる、高校生自作ゲームコンテストに提出するゲームをチームで作ってるんです」

説明をしている戸田かりんの後ろにはチームメンバーであろう、碓いちえ、佐藤音、込遊祥子、須賀ちよの4人がいた。

「どんなゲーム作ってるの？」

「一般的な2D横スクロールアクションです」

「ガチプロのちよがなんとかしてくるらしいので問題ないです!!」

「ちよっ、やめてよ。それだったら、音作ってる佐藤の方がガチプロなので」

「祥子は今java頑張ってるもんね〜」

「ガチプロになれるよう頑張る!!」

和気あいあいとした空気で楽しそうだ。微笑ましいな。

「かりん、じゃあ私もう行くね。頑張ってるね」

「はい、任せてください。いつか追い付いて見せますよ、せくんぱいっ♡」
少しぞわつとした。私も頑張らないとな。

適当に自販機でジュースを買って、部活をしている部屋に戻ろうとするととても挙動不審に部屋の前をうろうろしている木津さんが見えた。木津さんほんとどこにでもいるよね。話しかけてみよう

「木津さん何やってんの？」

「え？あつ…な…なんでもないです…。」

そう言い残すとそそくさどどこかへ行ってしまった。何だったんだろう？まあいいか。よし、コンテストに向けて頑張っちゃいますか!!止まってなんていられない。今はただ楽しく作り続けるだけ。

最終章 終わりと始まりの日記

高々と自分の中で宣言し、帰り道に日記を買った。絶対面白くなるはず。

2017年11月20日

今日から日記を付けようと思う。この日記には日常にひそむ儂き百合を見つめ密かに楽しみ、記録することで何度でも尊いを感じるためである。単に帰り道で思いついた

ただだがとりあえずやってみる。毎日はあるから尊いことがあったときだけ書こうかな。

12月2日

今日の昼ご飯にお互いにあーんしてる鈴鹿さんと阿部さんがいた!!! やっぱ二人仲いいな。尊い。私には一緒に食べる人はいないんだけどね。コミュ障だから誘えない…

12月15日

白子さんたちがいつも通り待ち合わせしてるところが見えたので少しつけてみた。みんな仲良い。素晴らしい。館さんのガチ感とそれを理解しているであろう白子さんいい組合せだよ。あのグループは妄想が捗る捗る。こういうグループで帰るの憧れる。無理だけど。。。一瞬白子さんにつけたのバレたような気がしたんだけど大丈夫だったかな……

12月23日

今年最後の学校の日に予定を確認し合うのっていいよね。一緒にでかけたいという気持ちがある前面上に出ててなんかデートに誘ってる感じがしていい。(私の完全なる妄想) しかも、不器用な子は不器用なりに頑張ってる誘ってる様子も可愛いし、それをわかりながらいじわるするのも尊い。すばらしい

2018年1月6日

久しぶりの学校。百合小説を漁りまくって尊みを授かってたけどやっぱりもともと尊い。結末が決まってるからその儚さとドキドキ感がある。遠藤さんと那須さん今日もずっと一緒だった。しかも、那須さんは手を組もうとしてたし。いやもうあれ付き合ってるでしょ。

1月20日

なんとなく教室に残っていると、三宅さん達がインディアンポーカーを始めてた。ていうか始めてる。金川さんが自分の事「たま」ってよんでるの可愛いな。すごい本田さん負けてるんですけどww弱いw。結局、三宅さんに本田さんが奢るっていうオチか。三宅さん強かったからn。。。いきなり挨拶されてびっくりしちゃった。私ちゃんと挨拶できてたかな。

2月7日

風の噂で聞いただけけど、遠藤さん同じ中学の子の前ではちよつと砕けた感じになるらしい。いつもあんな厳格な遠藤さんからは想像もできないけど見てみたい。尊いにおいがプンプンする!!名前はたしか、藤輪ひよりさんだったかな?遠藤さんと那須さんと藤輪さんの三角関係に期待せざるをえないよね

2月26日

家永心愛先輩のシスコン談義を小耳にはさんだ。通りがかりに他の先輩に話してた

から聞いてみたんだけどやっぱいいよね。姉妹百合。兄弟姉妹は一番距離の近い他人って言い方もできるし、昔からずっと一緒にいる存在ともとれる。そこにある家族愛と恋愛がごっちゃになっていく感じが。。。純粋な独占欲から美しい支配欲へと変わっていく感じがたまらない。幼い頃のお姉ちゃん甘々もたまらないけど、大きくなつて純粋な家族愛ではない何かに目覚めてしまったってシチュエーションとかもう最高だね。家永先輩がここまでいってるとは断言してないからね!!あくまで私の妄想っていうか好きなシチュ

3月18日

そろそろ、今年度終わり。春休みが入るまで百合を目に焼き付けなきゃ。それにしても、遠藤さんと那須さんずっと一緒だな。目線の合わせ方、手の位置、距離の近さ、どれを見ても実質恋人じゃん。付き合っちゃえばいいのに。那須さんもめっちゃ遠藤さん好き好きオーラだしまくってるもんね。遠藤さんもまんざらでもなさそうだし。キスクらいならやつてそうだもんね。那須さんが迫って断り切れない遠藤さんを……。これ以上はダメだ。今日の日記はこれで終わり

4月8日

新たに新入生を迎え、より賑わいを増している情報処理部をのぞきながら尊いを探していると、東さんに不審がられてしまった。気を付けなきゃ。最近暴走気味な気がする。

4月10日

大変なことになった。遠藤さんにこのノートを見られてしまった。風紀委員でもある遠藤さんは先生に報告したらしく私の処置について話し合っているらしい。なんとかこのノートは返してもらったけど、これからどうなっちゃうのかな。

4月11日

次の日、学校行くと学校中が私の噂で持ちきりだった。このノートのことだ。やっぱり、風紀的にもアウトらしくそれなりの処置があるらしい。確かに色々書いてたものを本人に見られるのはいけないことだと思うし、その点は反省しなきゃいけない。申し訳ない。

4月12日

私の処置が決まった。3か月の謹慎だそうだ。学校の学習状況に置いていかれるのが少し怖かったが、プリントが届けられるようでその辺りは心配しなくて良さそう。さすがにちよつとやりすぎだったな。あとで謝罪文を書いて送ろう。もつとも許してくれるかどうかはわからないけど。

5月19日

遠藤さんから謝罪文の返答がきた。開けるのをちよつとためらったがおくられてきたものを見ないわけにはいかない。手紙を開くと、

『丁寧ありがとうございます。ここまで、事態を大きくしたのは私にも責任の一端があります。しかし、これからあのようなことは決してないようにお願いしますね。それでは学校でお待ちしております。』

追記 内容が内容ですがあなたの発想力は目を見張るものです。ノートに閉じ込めておだけじやもつたいないですよ。』

と文が書かれていた。とにもかくにも、安心の一言だった。ほんとに怒ってなくて良かった。でも、気になるのは最後の一文。確かに閉じ込めてただけなのかもしれない。私の気持ちを、言葉を、

7月8日

明日は登校日。もう、このノートに頼らなくても良さそうだ。もう大丈夫。自分の口で、自分の気持ちを……

謹慎が明けた最初の登校日。気まずさ乗り越え登校する私に声をかけてくれる一人の女の子がいた。風紀委員の遠藤さんだ。

「木津さん、おはようございます。お久しぶりですね。お元気でしたか？」

「おはようございます!!はい、元気でしたよ!この間読んだ百合小説が良くてですね。」

「もう、実在する人物であのようなことはもうしていませんですよね?」

「さあ、どうですかね〜」

「今度は許しませんよ。いっそのこと燃やして灰にしちゃいましょうか?」

「燃やす?!?うわああああああ」

追いかけれながら呟いた「ありがとう」が届いたかわからないけど遠藤さんがし
かめっ面なのに笑っているような気がした。

今ならちゃんと言える。新しい自分の言葉で

木津芽衣物語第二章開幕の瞬間を、今ここに

エピソード

だまつて一人で過ごしていた時と比べ、話す人も増え色んな人と絡むことができた。
一人黙々と百合ノート制作してたときが懐かしい。まだ、要注意四天王なんて呼ばれ方
されてなかったなあ。今では百合を語れる友達ができて一緒に密かに色んなカプを見
守っている。そういえば、遠藤さんに最後にあつたのはあの時が最後だな。1か月前の
選挙で見事当選し、千枝流学園の生徒会長になつてからはバタバタして話しかけるタ
イミングがなかった。思い出に浸っていると、新生徒会の1年生組が走っていくのが見
えた。もう、感覚に任せて行つてしまおうか

なんの言葉も持つてなかった私が繋がり始める物語をたとえみんなが忘れようとも私は絶対に忘れない。辛くとも大切な終わってしまった物語と楽しみで未知なこれから始まる物語を両手に抱えながら生徒会室へと向かった。

エピソード0 プロローグ、1章

プロローグ

小さい頃からの憧れだった千枝流学園。何の変哲もないどこにでもあるような私立の女子校だ。しかし、地元では珍しい華々しい存在に通えることになった私、木津芽衣はいきなり現れた美少女転校生に一目ぼれしちゃって?!?!

なくんて、ありがちな自己紹介と共にありきたりな百合シチュ妄想してしまった。魔法少女にでもなつてその子のために悪魔として世界を作り直すつてもなかなかいいわね。いつも通り何気ない学校の帰り道、相も変わらず自分で百合妄想なんて我ながら引く……まあ、尊いからよしとしよう。なんてつたつて姫女子で夢女子だもんねっ！（はい、そこ、意味違くない？とか言わない。こまけえこたあいいんだよ。女の子が好きなんだよそれだけだよ）

でも、もつと尊いシチュはないかな？……あ！そうだ。いいこと思いついた……

1章 生徒会役員達

学校が終わり、まず向かうところはただ一つ。生徒会室だ。伝統ある千枝流学園の新生徒会が決まって早一か月。風が涼しくなり夏の暑さが中途半端に残る10月を迎え一層身が引き締まる。会計という役割を貰ったからにはやりとげるのが義理だろう。生徒会室が見えてきた。よし、今日も頑張るぞ。

「こんこちは」

生徒会室の扉を開け開口一番に挨拶を済ませる

「藤吉さんこんこちは」

会長から挨拶を頂けた。我が学園の生徒会長、遠藤直はすでに仕事を始めていた。さすが会長だ。感心していると、会長の隣からもう一つの声が聞こえた。

「えるちゃんやつほ〜」

那須副会長の明るい声が生徒会室中に響き渡る。やつぱはこの子いつも元気だな。適当な挨拶を済ませると自分のいつもの席に座り、周りを見渡す。会長と那須さんと自分以外に誰もいないようだ。1年生メンバーが見当たらない。

生徒会メンバーは先ほど挨拶した2人と私、そして書記の遠藤あん、同じく書記の福田唯香。以上の2年生が3人、1年生が2人の5人での体制なのだが1年生の2人がまだ来ていない。

「1年生遅いですねえ」

「確か1年生は集会があるらしいけどそろそろ終わると思うわ」

何の気なしに呟いた独り言に会長が答えてくれた。

「遅れました!!」

「話をすればなんとやらだね」

さて、ちょうど1年生組が合流したところでお仕事始めますか!!

「会長!!今日は何をしますか!」

やる気満々に尋ねる

「先週も言ったのだけれども、今年度、生徒会で動く大きいイベントは卒業式だけで、期間がまだあるので今日も雑務をお願いします」

「そうですよね…」

こう言っちゃあ、あれだけ少しものたりない気がする。せつかく生徒会に入ったんだからもつと忙しくなると思ってたんだけどな。

「心配しなくても卒業式準備がはじまるといなくてもなく忙しくなるから今は通常業務頑張らしましょう」

会長からの言葉にもう一度頑張ろうって気持ちになったが、一つ気がかりなことがあった。

「それで、どうして芽衣がここにいるの?」

「ふえっ?!?!」

すつとんきような声を上げながらその子はその場に立ち上がる。

「え? バレてたの?」

「当たり前でしょ。ゆいか達と一緒に入ってきてたの見てたんだからね」

「そこで止めない藤吉さんも大概だけれども…」

いやまあ、面白そうだったしいかなって…てへペろ。

この子は木津芽衣。私のいとこなんだけれど色々と変わってる。ていうかこの子ほんとどこにでもいるな。

「それで何の用なのよ」

「別に。暇つぶしに來ただけだよ」

いや暇つぶしにくんなよ…。って言葉は飲み込み、悪戯に四天王の話を振った。

「そういえば会長、要注意四天王の対策はどうしましようか」

この千枝流学園は地域の方々にも認められる風紀ある華々しい女子高だ。しかし、中には風紀を乱すものもいる。その中でもより要注意な人物が4人いる。その名も四天王。数々の伝説を残す彼女らは生徒会でも手に負えないほどやばい。そう、やばいのだ。その話を振ったのはもちろんこの木津芽衣がその一角を担っているからだ。

「そうね、要注意四天王は…現行犯で捕まえ課題を倍に。特に木津さんは20倍にしてください。もしくは私が直々に燃やします。」

風紀を重んじる会長は四天王に対してとても厳しい。特に木津さんに対してはヘイトがえぐい。一体なにしたのよ芽衣…

「ちよつと待つてよ会長!!なんで私だけ20倍?!」

「うるさいですよ。黙らせるために一度燃やしますか?福田さん手伝いなさい」

「はい、閣下!!」

「なんでそこノリノリ!?そんなに私悪い事した??」

「姉ちゃん、あんも手伝うよ!!」

「ここでは会長と呼びなさいっていつも言ってるでしょ。まあいいわ。あんも一緒にやるわよ。」

「じゃあ、私もっ!!」

え?那須さんも??私以外みんなノッチャった。私も流れに乗っちゃお。

「芽衣!!これを食べらえ!!黒バス青黄合同!!グフフフフ」

「姉ちゃん、あれなに?」

「あん、見ちゃだめよ。あんにはまだ早いわ…」

『黒木のバス』の青間君と黄原君のカップリング、青黄が詰まった一冊。すべての話の

展開がずっとドキドキしてもう読むのがしんどい…。辛い…。とにかく、青黄オタク全員に呼んで欲しい伝説の一冊!!」

しまった…つい、いつものが出てしまった。

「青黄は地雷なおおおおお」

主人公黒木と赤峰のカプ、黒赤が好きなきな芽衣の逃げていく様子を見ながら下校時間を告げるチャイムが聞こえた。

「お前ら、まだ残ってたのか。さっさと片付けして帰るんだぞ」

生徒会顧問の田洲岡先生からも言われたし帰る準備するか。

「そろそろ帰りますか。」

「そうね…」

会長は安堵したような笑顔で木津さんを見送りながら帰り支度を進める。

結局、今日は遊んで終わりだったけどこれはこれで楽しかった。こんな日々が続けばいいな。

人もまばらなオレンジ色の帰り道。すでに一日の活動を終えた校舎を背に歩き始める。

始まってまだ1か月。よし、明日も頑張るぞい!!

エピソード0 2章

2章 帰宅部活動記録ノート

生徒玄関前集合だったよね。いつも通り。昨日も一昨日も明日も明後日も毎日待ち合わせを做的是いつも通りのみんなと帰るいつも通りの帰り道。また今日も私が一番乗りだ。早く来ないかな。

「おっ、やっぱねるは早いなあ！」

手持無沙汰に待っていると早速2人目がやってきた。可児京、いつも通りのメンバーの一人だ。

「京が遅いだけだよ。他の子もそろそろ来てもいい頃なのに」

「LHRが長引いてるらしいね」

他愛無い会話を繰り返しながら待っていると、走り寄ってくる人影が見えた。

「ごめん、待った？」

「ううん、今来たところ。じゃあ行くこうか」

「なに遊んでんの……」

遅れてきたれん子とめぐみがここまで走り寄りいきなり腕を組みながら歩きだした

もんだから面食らってしまった。マジでなにこれ…:

「デートで待ち合わせしているカップルの真似だつて。さつき思いついたらしい…:」

一緒に来ていた、くみが控えめな可愛らしい声で訂正してくれた。まあ、細かいことは気にしないでおう。揃ったことだしぼちぼち行くか。

「飽きた」

校門を抜け自分たちの家に向かって歩いてしていると唐突にれん子がこの一連の流れに飽きたのか腕を組むのをやめた。ほんとこの子らノリで生きてんなあ。

「どうして!!あの時、ずっと一緒にいるって言ってくれたじゃない!!れん子と離れたくない!!」

一瞬ネタだと思うが、めぐみと幼馴染の私にはわかる。この子、半分くらいガチだ。昔からレズっ気が多少あったが、最近拍車がかかっている気がする。女子高だからしょうがないのかな。まあ、別にいいと思うけどね。当のれん子はくみと京の会話に混ざって話を聞いていない。しょうがないからめぐみと話してやるか。

いつも通り道なりに歩いていると、道沿いにある帰りにいつも入る駄菓子屋が見えてきた。

「今日も行こうよ!!」

「よし、行くか。」

京とれん子に押されて店に入ると、意外な2人がそこにいた。

「愛！クレア！なんでここに？？愛達の学校は真逆の方向じゃない？」

「いやあ、クレアがどうしても駄菓子屋行きたいっていうもんだから連れてきた」

京の中学の時の同級生である針須愛と愛の学校の転校生である九条クレアとは京繋がりです交流があつた。

「タイヘンですよ！！子供がさわられる位置にタバコが置いてマス！」

「これは、ココアシガレットっていうお菓子なんだよ。食べてみる？」

「タバタイです!!」

愛とクレアの掛け合いは見ていて微笑ましい。さて、私もいつものやつ買うか。私は80円のラムネときなこ棒2本でちょうど100円のセットをいつも買う。100円でこの満足感は素晴らしいし、おやつとしてちょうどいいポリウム。完璧。完成された形。みんな各々自分のものを買い、食べ歩きながらも一度帰途につく。

ん？あそこにいるのは木津さん？なんでこんなところにいるんだろう。ほんどこにでもいるなあ。まあ、気にしないでいいか。そろそろ、みんなが分かれる分かれ道だ。

「じゃあ、ここにさよならだね。」

「皆の者、闇にのまれよ」

「ああ、寂しい。いつそのことねるの家でお泊りしたい」

「えっ、スルー!?!」

「あつ、いいねえ。やろうよ。5人でお泊り!!」

「じゃ、じゃあ…週末とかは…」

「面白いそうだね。じゃあ、続きはLINEで話そうよ。それじゃあまたね。」

5人が各々思い思い話しながらそれぞれの帰途につく。うん、いつも通り。レズっ気
のめぐみも、蘭子好きのれん子も、実は四天王の京も、いつもサポートしてくれるくみ
も、この私も。

「あつ、一番星だ」

あと何回星を見上げるのだろう。限られた時間の中で私たちのいつも通りはいつも
通りに流れていく。

エピソード0 3章

3章 ほーかごぐらし

「はあく、終わった終わった〜」

本日最後の授業チャイムがなり、ある者は部活に、ある者は生徒会に、ある者は帰途につき散り散りになる教室の一角で一般には知られていない秘密の会合が開かれるのであった」

「いや、こんな公の場でやる秘密の会合があつてたまるか」

きいの冗談に適當につっこみながらいつものごとく集まってきたみんなに目を向ける。自分の手元にあるスマホとにらめっこしながらゲームをたのしんでいる。

「ああああああ、1グド……」

「は？なんであそこ抜けるの??」

「りんごはまだましでしょ、りんごは文句言う資格ないから」

私ときい以外の鳴、なの、環は『パンドリ！ガールズパンドパーティー』、通称ガルバの協力ライブをしている。

「せっかくこれだけいるしなんかやろーよ。ほら、いさみも暇そうにしてるでしょ。」

自分が暇だからって私をだしに使わないですよ。確かに暇ではあるけど。

「別にいいけどなにやるの?」

めんどくさそうな返事をする環をスルーして、きいはおもむろにトランプを取り出す。

「このメンバーでインディアンポーカーをします!!」

インディアンポーカー?ポーカーは知ってるけど、インディアンポーカーは初めて聞いたな。

「インディアンポーカーってなに?」

めいの疑問に答えるべく、きいは意気揚々と説明をはじめめる。ほんと楽しそうだな。

「インディアンポーカーとは、それぞれ1枚カードを見ないように引いてみんなが見えるようにおでこの前に掲げる。あとは普通にポーカーと同じ。自分が勝てると思えば「勝負」、負けると思えば「降りる」を宣言。今回は賭け金はなしで、単純に勝ったら1ポイント、勝負して負けたら1ポイントで3ポイント先取で勝ち。最下位の人からジューズ奢りでどう?」

「まあ、ともかくにもやってみなきゃだな。」

「結構面白そうじゃん。」

なんだかんだノリがいいのありがたいな。ルールは大体分かったしやるか。

「じゃあ、さっそく始めようよ」

各々がカードを1枚ずつ手に取りおでこに掲げる。

なのが5、きいが8、環が6、鳴が10。ぽつと見、鳴が一番大きいが自分の数字が分からない以上簡単に降りるのももつたいない。少し揺さぶりをかけてみるか。

「きいの数結構大きい。私は降りよつかな。」

さて、鳴はどうするか。

「え？鳴のほうが大きくない？」

「ぼつか、なの。ここう言っちゃったら…」

「じゃあ、私勝負する」

ほらく、鳴が勝負しちやつたじゃん。まあ、私の方が小さいことがわかつたし降りるか。

「私は降りる」

「じゃあ、私も」

「自分は勝負する」

「降りる」

なのと鳴だけ勝負して第一回目の話し合いは終了。

案の定、私のカードは6で10には届かなかった。マイナスポイントにならなかつただけましか。

現在ポイント きい、環、いさみ0 鳴1 なのー1

早速次のゲームを始める。

今回のカードはなのがJ、きいが5、環が3、鳴が3。早くも環が動いた。なのの方を見ながら

「今回はたまの勝ちかな〜」

なるほど、そういう狙いか。この環が作った流れに乗るか。

「環が勝つかどうかはわからないけど、なのには勝てそうな気がする。」

さあ、どうする。なの。

「え？マジで??じゃあ降りちゃお」

あれ？簡単に降りてくれた。ちよろい。問題は自分がきいより大きいかどうかなんだよな。ここは勝負するか!!

「よし、勝負する」

「勝負」

「()は降りる」

各々判断し、勝負を選んだのはは私と鳴ときいの3人になった。結果は私の勝ち。私

のカードは8だった。やった!!

「ちよつと!!私勝負したら勝つてたじゃん!!」

「ほんと、なの弱すぎwww」

「素直すぎ」

「次は絶対勝つてやる〜」

現在。ポイント 環、鳴0 いさみ1 きい、なの—1

それからゲームは続き、勝負は大詰め。ポイントが環1 鳴、私2 きい0 なの—3となった。それにしてもなのが弱すぎる。

次のゲームが始まった。

今回のカードはなのが3、きいが6、環が10、鳴が5。問題は初手だ。誰を勝負させ、誰を降りさせるか。自分が勝つためにはその見極めが大切だ。お互いがお互いに考察を巡らせ自分に有利な状況を作り上げていく。何度も繰り返してプレイしているため、より高度な心理戦を強いられる。先に動いたのは環だ。環はきいに揺さぶりをかける。

「勝ちたかったら今回は引いた方がいいかもよ〜」

「あつそ、じゃあ引かないわ。」

まあ、そうなるでしょうね。大きめの数を落とすのはセオリー。ということは最初に

狙われた人はその人にとって一番大きい数である可能性が高い。よって引かない方が得。というわけでもない。それを狙ってわざと低い数に揺さぶりをかけるという作戦も取れるのだ。結局そのあたりも色んな人の揺さぶりを聞きながら自分で判断するしかない。そのためにも引かずにしっかりと見極めるといえるのは無難だろう。しかし、今回の場合は環からみても6という数字は高めにあるはずだ。他の数は3とか5なのだから。つまり、この揺さぶりはさっきの話の前者。大きい数を潰すという狙いがあつたのかも知れない。ということは、私は少なくとも6よりも下である可能性が高い。これも含めもう少し考えてみよう。

「たまk……」

名前を言い終わる前に、ある危険性に気付いた。私が6より下という可能性がある以上、この場の一番大きい数は環の10である可能性が高い。ここで変に揺さぶりをかけると、環に一番大きい数を持っているということを教えることになってしまふ。直接揺さぶりをかけずに自分が小さいと思込ませる方法はないかな。そうだ。これだ。私は環のおでこに掲げられたカードを横目で見ながら話し始めた。

「環はきいを潰したいだけだよ。信じるかどうかは任せるけど、勝負すると勝てる。こつち側としてもリーチが増えるよりまだマシ。降りちゃダメだよ。」

あえて、2番目に大きい数のきいを推すことで自分は小さいんだと思わせる。これ

で、乗ってくれば降りてくれるはずだ。

「たまは降りるよ」

よし、これで私も降りてしまえば無駄な失点をおさえr…。待てよ…。もしこれと同じことを最初から環がやってたとしたら？私を降りさせるためにあえて2番目に大きいきいに揺さぶりをかけてたとしたら？私のただの妄想だとしたらせつかくのリーチを逃すことになる。でもこれで俺が6よりも大きかったら？その可能性を見つけてしまったらそれ以外に考えられない。ここは…。

「勝負する」

言ってしまった。でも、もうあとは結果を見るだけだ。後悔はない。

最終的に勝負したのは私、きい、鳴の三人。もし鳴が一番大きかったら鳴の勝ちでこのゲームは終わりだ。でも、私もリーチだ。もちろん、私の勝ちの可能性もある。さあ、勝負だ！

3人はおでこに掲げられたカードを同時に表向きで机に置く。きいが6、鳴が5、そして私が、Q。やった!!! やっぱり、そういうことだったんだ！

「え？たま結構大きかったじゃん！」

「私、環と同じことしてたんだよ!! 気付いたのはギリギリだったけどね。」

「なんだよお。悔しい!!」

わいわい、みんなでおしゃべりしたところでみんなが忘れてるであろう罰ゲームの話
をしよう。

「1位は私で最下位はなのに決まったところで、ジュース奢りタイム!!!」

「忘れてた!!それで、なにが飲みたい?」

「魔剤」

「ここぞとばかりに210円もするエナジードリンクを所望した。あ、魔剤っていうのは
モンスターエナジーのことね。これ常識だから。」

「いさみそれ好きよね」

「いや、いさみだけじゃなくてみんな好きでしょ。たまも好きだし。徹夜に効くんだよ
ね」

わいわいしていると、廊下を歩いていた生物の麦田先生が教室のドアを開ける。

「おいお前ら、もうそろそろ下校時間だから早く帰れよ。木津、お前も早く帰るんだぞ」

え? 木津さん? 私は先生が目を向けた教室の後ろのドア近辺に目を向けるとそこには
静かにひたすら何かを書いている木津さんの姿があった。びっくりした。ていうか、木
津さんどこにでもいるな…。それはともかく、麦田先生にも言われたしさっさと帰ろ
う。

「じゃあ、みんな帰ろっか」

帰り支度を整え、教室を出る。一応あいさつしとこう。

「木津さん、また明日ね。さようなら」

「さっ… さよなら…」

少しキョドった様子で返してくれた。人見知りかな？クラスメイトだしもつと気軽に接してくれると嬉しいんだけどな。

私は教室を後にした。ただ一人、彼女をあとに残して

エピソード0 4章

4章 死んだ魚の目睡眠不足デスマーチ部

最近の千枝流学園には体育会系の部活以外にも文化系の部活も充実している。文芸部、茶道部、美術部、電子工作部、そしてわたしの所属する情報処理部。他にも、何個かあるが有名どころはこんなものだろう。情報処理部は主に情報系の活動をしている。具体的には、度々行われるコンテストで発表されたテーマにそって開発をしたり、この部での活動を通して学んだこと研究したことをみんなの前で発表などをしている。今日もいつも通り、次のコンテストのためにアイデアを練るか。

そのコンテストに出るメンバーである香風恵子、海老名花帆、長江百合で囲む机へ近づく。

「みんな早いな」

「果奈が遅いだけだよ」

「おつ、やっと来たか。早速続き話してくよ」

「イノシシ被害を抑えるためにg…」

今は、コンテストのテーマであるイノシシ被害をICTを用いてどう対処するかという課題に取り組んでいる。

「イノシシをどう検知して、どう対処するか。そしてその対処をしていく上でどういうシステムを作っていくか」

「赤外線感知つてできるかな？」

「どんなプログラム書けば効率的に伝達できるかなんだよ」

結構、議論は進んできたしちよつと遊びに行つちやつてもいいかな。気分転換にもなるし。

「ねえ、一旦休憩しない？喉乾いたから水買ってくるね」

その場から離れるとすぐに、1年生メンバーのグループが見えた。何かやつてるのかな？聞いてみよ

「かりん達はなにしてんの？どつかのコンテストの開発？」

「はい、私たちは近々行われる、高校生自作ゲームコンテストに提出するゲームをチームで作ってるんです」

説明をしている戸田かりんの後ろにはチームメンバーであろう、碓いちえ、佐藤音、込遊祥子、須賀ちよの4人がいた。

「どんなゲーム作ってるの？」

「一般的な2D横スクロールアクションです」

「ガチプロのちよがなんとかしてくれるらしいので問題ないです!!」

「ちよっ、やめてよ。それだったら、音作ってる佐藤の方がガチプロなので」

「祥子は今Java頑張ってるもんね〜」

「ガチプロになれるよう頑張る!!」

和気あいあいとした空気で楽しそうだ。微笑ましいな。

「かりん、じゃあ私も行くね。頑張ってるね」

「はい、任せてください。いつか追い付いて見せますよ、せくんぱいっ♡」

少しぞわつとした。私も頑張らないとな。

適当に自販機でジュースを買って、部活をしている部屋に戻ろうとするととても挙動不審に部屋の前をうろうろしている木津さんが見えた。木津さんほんとどこにでもいるよね。話しかけてみよう

「木津さん何やってんの?」

「え? あっ…な…なんでもないです…」

そう言い残すとそそくさどこかへ行ってしまった。何だったんだろう? まあいいか。よし、コンテストに向けて頑張っちゃいますか!! 止まってなんていられない。今はただ楽しく作り続けるだけ。

エピソード0 最終章、エピソード

最終章 終わりと始まりの日記

高々と自分の中で宣言し、帰り道に日記を買った。絶対面白くなるはず。

2017年11月20日

今日から日記を付けようと思う。この日記には日常にひそむ儂き百合を見つめ密かに楽しみ、記録することで何度でも尊いを感じるためである。単に帰り道で思いついただけだがとりあえずやってみる。毎日ほたるいから尊いことがあつたときだけ書こうかな。

12月2日

今日の昼ご飯にお互いにあーんしてる鈴鹿さんと阿部さんがいた!!! やつぱ二人仲いいな。尊い。私には一緒に食べる人はいないんだけどね。コミュ障だから誘えない…

12月15日

白子さんたちがいつも通り待ち合わせしてるところが見えたので少しつけてみた。みんな仲良い。素晴らしい。館さんのガチ感とそれを理解しているであろう白子さんいい組合せだよ。あのグループは妄想が捗る。こういうグループで帰るの憧れ

る。無理だけど。。。一瞬白子さんにつけたのバレたような気がしたんだけど大丈夫だったかな……。

12月23日

今年最後の学校の日に予定を確認し合うのっていいよね。一緒にでかけたいという気持ちで前面に出ててなんかデートに誘ってる感じがしていい。(私の完全なる妄想)しかも、不器用な子は不器用なりに頑張ってる誘ってる様子も可愛いし、それをわかりながらいじわるするのも尊い。すばらしい

2018年1月6日

久しぶりの学校。百合小説を漁りまくって尊みを授かってたけどやっぱリアルもとっても尊いな。結末が決まってるからこそその儚さとドキドキ感がある。遠藤さんと那須さん今日もずっと一緒だった。しかも、那須さんは手を組もうとしてたし。いやもうあれ付き合ってるでしょ。

1月20日

なんとなく教室に残っていると、三宅さん達がインディアンポーカーを始めてた。ていうか始めてる。金川さんが自分の事「たま」ってよんでるの可愛いな。すごい本田さん負けてるんですけどww弱いw。結局、三宅さんに本田さんが奢るっていうオチか。三宅さん強かったからn。。。いきなり挨拶されてびっくりしちゃった。私ちゃんと挨拶

できてたかな。

2月7日

風の噂で聞いただけけど、遠藤さん同じ中学の子の前ではちよつと砕けた感じになるらしい。いつもあんな厳格な遠藤さんからは想像もできないけど見てみたい。尊いにおいがプンプンする!!名前はたしか、藤輪ひよりさんだったかな?遠藤さんと那須さんと藤輪さんの三角関係に期待せざるをえないよね

2月26日

家永心愛先輩のシスコン談義を小耳にはさんだ。通りがかりに他の先輩に話してたから聞いてみたんだけどやっぱいいよね。姉妹百合。兄弟姉妹は一番距離の近い他人って言い方もできるし、昔からずっと一緒にいる存在ともとれる。そこにある家族愛と恋愛がごっちゃになっていく感じが。。。純粋な独占欲から美しい支配欲へと変わっていく感じがたまらない。幼い頃のお姉ちゃん甘々もたまらないけど、大きくなって純粋な家族愛ではない何かに目覚めてしまったってシチュエーションとかもう最高だよね。家永先輩がここまでいってるとは断言してないからね!!あくまで私の妄想っていうか好きなシチュ

3月18日

そろそろ、今年度終わり。春休みが入るまで百合を目に焼き付けなきゃ。それにして

も、遠藤さんと那須さんずっと一緒だな。目線の合わせ方、手の位置、距離の近さ、どれを見ても実質恋人じゃん。付き合っちゃえばいいのに。那須さんもめっちゃ遠藤さん好き好きオーラだしまくってるもんね。遠藤さんもまんざらでもなさそうだし。キスクらいならやつてそうだもんね。那須さんが迫って断り切れない遠藤さんを……これ以上はダメだ。今日の日記はこれで終わり

4月8日

新たに新入生を迎え、より賑わいを増している情報処理部をのぞきながら尊いを探していると、東さんに不審がられてしまった。気を付けなきや。最近暴走気味な気がする。

4月10日

大変なことになった。遠藤さんにこのノートを見られてしまった。風紀委員でもあの遠藤さんは先生に報告したらしく私の処置について話し合っているらしい。なんとかこのノートは返してもらったけど、これからどうなっちゃうのかな。

4月11日

次の日、学校行くと学校中が私の噂で持ちきりだった。このノートのことだ。やつぱり、風紀的にもアウトらしくそれなりの処置があるらしい。確かに色々書いてたものを本人に見られるのはいけないことだと思うし、その点は反省しなきやいけないな。申し訳ない。

4月12日

私の処置が決まった。3か月の謹慎だそう。学校の学習状況に置いていかれるのが少し怖かったが、プリントが届けられるようでその辺りは心配しなくて良さそう。さすがにちよつとやりすぎだったな。あとで謝罪文を書いて送ろう。もつとも許してくれるかどうかはわからないけど。

5月19日

遠藤さんから謝罪文の返答がきた。開けるのをちよつとためらったがおくられてきたものを見ないわけにはいかない。手紙を開くと、

『丁寧ありがとうございます。ここまで、事態を大きくしたのは私にも責任の一端があります。しかし、これからあのようなことは決してないように願いますね。それでは学校でお待ちしております。』

追記 内容が内容ですがあなたの発想力は目を見張るものです。ノートに閉じ込めておだけじやもつたいないですよ。』

と文が書かれていた。ともかくにも、安心の一言だった。ほんとに怒ってなくて良かった。でも、気になるのは最後の一文。確かに閉じ込めてただけなのかもしれない。私の気持ち、言葉を、

7月8日

明日は登校日。もう、このノートに頼らなくても良さそうだ。もう大丈夫。自分の口で、自分の気持ちで……

謹慎が明けた最初の登校日。気まずさ乗り越え登校する私に声をかけてくれる一人の女の子がいた。風紀委員の遠藤さんだ。

「木津さん、おはようございます。お久しぶりですね。お元気でしたか？」

「おはようございます!!はい、元気でしたよ!この間読んだ百合小説が良かったですね。」

「もう、実在する人物であのようなことはもうしていませんですよね?」

「さあ、どうですかね?」

「今度は許しませんよ。いつそのこと燃やして灰にしまいましょうか?」

「燃やす?!?うわああああああ」

「追いかけれながら呟いた“ありがとう”が届いたかわからないけど遠藤さんがしかめっ面なのに笑っているような気がした。」

今ならちゃんとと言える。新しい自分の言葉で

木津芽衣物語第二章開幕の瞬間を、今ここに

エピソード

だまって一人で過ごしていた時と比べ、話す人も増え色んな人と絡むことができた。一人黙々と百合ノート制作してたときが懐かしい。まだ、要注意四天王なんて呼ばれ方されてなかったなあ。今では百合を語れる友達ができて一緒に密かに色んなカプを見守っている。そういえば、遠藤さんに最後にあったのはあの時が最後だな。1か月前の選挙で見事当選し、千枝流学園の生徒会長になってからはバタバタして話しかけるタイミングがなかった。思い出に浸っていると、新生徒会の1年生組が走っていくのが見えた。もう、感覚に任せて行ってしまうか

なんの言葉も持ってなかった私が繋がり始める物語をたえみんなが忘れようとも私は絶対に忘れない。辛くとも大切な終わってしまった物語と楽しみで未知なこれから始まる物語を両手に抱えながら生徒会室へと向かった。

—side story— 現状と幻想

あの人の好きな人になれたなら

誰もが一度は願う幻想

そんなありきたりに例外なく心を乱される私は

静かに本を閉じた。

そろそろあの子が来る頃だろう。

改札口を抜け、こちらに駆けよってくる人影を捉える

おっと、話をすればなんとやら。まあ、話はしてないんだけど。

「ごめん、すぐ！待った？」

「いや、今来たところだよ」

実際はそうではないのだが、変な気を使わせる必要も感じないのでテンプレを返す。

もつとも、集合時間30分前から待っていたことは言うまでもないだろう。

「じゃあ、行こっか!!」

今日はひよりの高校での友達の誕生日プレゼントを買いに行くということで私が駆り出された。

学校も違う、知らない友達の誕生日プレゼントと一緒に選ぶというよくわからない状況なのだが、ひよりと一緒ににお出かけができるという利点が私の心を動かしたのだ。

「それで、どんなプレゼントをあげるか目星はついてるの？」

「ん、なんも決まってるけど、良い感じのが見つければそれでいいかな」

「それでいいんだ。。。」

昔ながらの適当さに呆れながらも、変わってないことがなんだか嬉しく感じる。

高校で離れてからは、連絡は取っているものの顔を合わせる機会が少なくなっていた。知ってるひよりが隣にいてくれる。変わらないものがあることにどこか安心していた。

そうこうしてるうちに、最寄りのショッピングモールにたどり着いた。と言っても、用事があるのはひよりだけなので、とりあえずひよりの赴くままに付き添う形になる。

「これ、可愛い!!」

「このヘアピン似合いそうな気がするな!!」

一人でわいわい盛り上がりつつあるひよりを横目に周りを見渡す。

ファッション小物がずらりと並ぶ店には今をときめく学生たちでにぎわっていた。

あまりこういった店になかなか入る機会がないため、心なしか場違い感を覚える。

ひよりは普段からこういった店に行ったりするのでらうか。

小さい頃もこうやって、一人でいる私を連れまわしてくれたな。

他にもたくさん友達がいるはずなのにいつも私を誘っては連れ回してすごく大変だったことを思い出す。

ふふつ。ほんと高2になった今でも変わんない。そう、あの時も今もずっと“友達”だ。

「すぐ？ 次の店行くよー！」

「あ、ちよつと待って」

物思いにふけっている私をよそにひよりはすたすたと歩きだす。

次の店は雑貨屋さんのようだ。

例のごとく、プレゼントを選ぶひよりの後ろをついていく。

並んでいる商品をぎつと目で流しながら歩いていくと、足を止めるほどに目を奪うものがあつた。

凄く可愛い。

しかし、このキーホルダーは私には合わない気がする。

そう思いながら惜し気に視線を前に向けると、先に行つてたはずのひよりがそこにいた。

「ん？これ欲しいの？」

「い、いや、こんな可愛い私には似合わないかなあつて」

「そんなことないよ？あ、そうだ！じゃあ、おそろいで二つ買っちゃおうよ!!」

「ひよりがそこまで言うなら。。。」

結局、ひよりの勢いに押され、その店で同じ種類のキーホルダーを一つずつ買った。

小さい頃から一緒にいるのだからおそろいで買ったのはたくさんあるが、おそろいの嬉しさは別に衰えるわけではない。

今回のキーホルダーも例外ではなく、しかも自分の好みでもあつたため、とても嬉しかった。

「あはは、すぐ、めっちゃ嬉しそうじゃ〜ん」

「まあね」

ひよりはたまに、私の心を見透かせるかのようにしたいことを叶えてくれる。でもそれは、友達としての親切でしかないとわかりきっていると、嬉しくなる反面、辛くなる。ずっと隣にいたのに。ずっと手には届かない。

いや、届いてはいけないのだ。

私とひよりは「友達」。

今までそうしてきたし、ひよりだってその関係が一番のはずだ。

それを崩してまで手を伸ばそうとは思わない。

そう思っただけ違う高校を選んではみたものの、その想いは消えてくれずにくすぶり続けている。

今思えば、自分の気持ちに耐えられずに逃げてしまっただけなのかもしれない。いつか溢れ出してしまうことを恐れて。

なんやかんやでプレゼント選びが終わり、そろそろ帰る時間になってしまった。

夕焼け色のアスファルトを足取り重く踏みしめる。顔を上げれば、短かった二人だけの旅路の終着点が見えてしまう気がして、うつむきがちに歩いていく。

そんな無駄な抵抗も虚しく、あっさり分かれ道である駅までたどり着いてしまった。「すぐ、今日はありがとね!」

「私も久しぶりにひよりと会えて嬉しかった。プレゼント喜んでくれるといいね」

「そうだね。じゃあ、またね!」

「うん。また」

遠ざかっていくひよりの背中を見えなくなるギリギリまで追う。人ごみに消えてい

くひよりを見届けてようやく帰途につくことができた。

今日も私はうまくやれていただろうか。

私の想いは普通ではない。

同性の友達を好きになってしまったのだから。

この想いが報われることがあつてはならないのだ。

我慢だ。心の中に必死にしまい込んで蓋をする。

禁断の玉手箱を胸に秘めながら

今日も一人、箱から漏れ出た幻想を夢見るばかり。